

宿命から使命へ

使命とは

如来召喚の聲に救われたる者には、必ずそこに精神的革命が訪れる。

曰く「宿命から使命へ」の大転換がそれである。

使命とは何か、曰く

「汝の生活を通しての、真実の發揮」がそれである。

「我等の世界では、

真実を生きてゆくこと

そのみが許されてある。

不幸や禍や苦しみを数えて自分の生き方の不徹底さを

弁解することは許されない。

全身を弾丸にして

唯、真実を通せ。

如来は真実である。真実とは如来である。」（聖光六卷四号の天言地声）
人格の尊嚴は唯この使命があるが故にのみ存在する。

生存

唯人間の享樂や、五感の本能的満足を人生の尺度にしている人間には、使命の自覚はあり得ない。だが、どれだけ個人的な快樂を得たか、本能的幸福を貪ったかということとは、真実人生の真実の記録には無意味である。

もし何等の使命の自覚がない時には、必ずそこには人間的不満や苦惱が宿命のなげきとなつて現われて来る。使命に生きることを忘れて、苦惱だけを取り除こうとするのは徒勞である。益々宿命の疊は高くなる。

たとえ、人生を肯定して、宿命に泣かずとも、人間的幸福が得られて、自分だけが人間苦に出会わないが故に大笑得意になつて居るのでは、決して未通りたる幸福ではなく、尊敬すべき生活ではない。己れ一人の幸福の故に動いて居ることに於いて變りはないからである。彼は真の意味の人格ではない。彼は生存者ではあつても生活者ではない。

されば宿命から使命への転換は、生存から生活への革命である。

如来に生きる

真実とは如来である。如来とは真実である。

「真実の發揮」とは如来に生きることである。

如来の絶対勅命は、無視することも、拒むことも、はからうことも出来ない權威をもつて、我等の現実に君臨し、我等を生かし、我等を動かして、必然の一道を歩みきらせずにはおかない。

如来と共にある時、仏凡一体なる時、宿命の岩壁は打ち砕かれ、涙の谷間は打ちはらわれて、罪悪業報、賞讃、悪罵、中傷、迫害、誘惑等々の一切を無碍道の上に越えて、使命への一道が、その現前脚下に打開されるのである。

巖上の松の何ぞ尊厳なる。彼にはただ固き岩に根を下して、水を求めて不断に伸びることだけが許されてあつた。彼には決して岩壁の前に宿命に泣くことは許されなかつた。苦節幾十百年、彼は今巖上の松として、荒海の波間に仰がるるのである。彼は大自然そのままである。

信心

我慢に非ず、貪欲に非ず、瞋恚に非ず、愚痴に非ず、不幸に非ず、恨みに非ず、悔いに非ず、怖れに非ず、疑いに非ず、南無阿弥陀仏は、清浄、眞実、唯一絶対の實在にまします。

唯、絶対の光と、無量の命にてまします。光とは智慧であり、寿とは慈悲である。智慧と慈悲との覚醒こそ、眞実そのものである。この如来の本願力、衆生の上に廻向顕現して金剛不壊の大信心となる、大信心は仏性である。如来と本性を同じうする。大信心の衆生こそ如来の眷族たる正定聚不退の菩薩である。

眞実發揮の舞台

正定聚不退の菩薩位に即くとは、大覚位、如来、世尊となるべき信念を恵まれて、如来召喚の声のままに、自然に法爾に、白道を行歩して退かぬ人のことである。

彼は、理想の浄土にむかつて、「願生彼国」「欲生我国」する願の人となる。一念に領得したる眞実は、歩一歩と彼の上に發揮せられて、人生生活を莊嚴するのである。

この時、一切の苦悩は彼を殺さず、彼を眞に生かす縁となり、眞実の發揮せられる舞台となる。生死煩惱の園林は、一切諸仏菩薩の遊戯したもう処、廣大なる如来の本願海に誕生して、仏子として更生したる者は、眞実なる歡喜を持つて本質的な人生の意味に生きるのである。

私有の凡夫は公有の菩薩と化し、宿命に泣ける流転の貧兒は、今や輝かしき聖業へ参加して永遠の使命に生きるのである。